



「忠臣蔵三百年」48番目の義士 菅野三平重實⑤

箕面を訪れた大高源五

赤穂浪士の一人である大高源五は、茶人の山田宗偏がしばしば吉良邸で開かれている茶会に招かれていることを知って宗偏に弟子入りし、元禄15（1702）年12月14日の茶会の日程を探り出して討ち入りの日を大石内藏助に決断させたという大きな役割を果たすとともに、吉良邸への討ち入りの際には一番乗りの先陣を果たしたことで有名ですが、俳句の歴史にも「子葉」の俳号で大きな足跡を残した人物です。

源五は、元禄14年9月に菅野の自宅に戻っていた親友の三平を訪れ再会していますが、その時の様子が翌年に刊行された子葉編「俳諧二つの竹」に書かれています。その内容は、子葉（源五）が旅の途中に同門の涓泉

（三平）の住まいを訪れたので、涓泉が子葉を伴って勝尾寺に参拝した後箕面の滝などを見物したという、俳人仲間としての交流が記録されています。

しかし、実際のところは、内藏助から指示を受けた源五が、主君浅野内匠頭の仇討ちの協議のために訪れていたことが推測されます。三平が自害するのは二人の再会の約4カ月後のことで、この再会が親友である源五との永遠の別れになりました。

三平とともに箕面の名所を訪ね歩いた源五は、三平の親戚で菅野に住む「藤井光貞（注①）」半町に住む俳人「厚東休計（注②）」の二人に誘われて現在の豊中市桜塚に住む俳人「落月庵西吟」を訪れましたが、なぜか三平は彼らと同一行動をとらず菅野にとどまりました。

その理由については不明ですが、この時すでに父・菅野重利や兄・重通が、三平の吉良邸への討ち入りに反対していて、源五と長く一緒に行動することを快く思っていないかったことによるのではないかと推測されます。

さて、光貞や休計とともに桜塚の西吟を訪れた源五は、西吟に請われて俳句を詠んだ後、伊丹まで足を運んで俳人「上島鬼貫」を訪ね、その後京都に戻りましたが、その足跡として源五の読んだ次の一句が、豊中市岡

町にある「原田神社」境内の句碑に残されています。

真枯れや 餅にとどまる

さくら塚 子葉



8月1日にNHKテレビで放映された大河ドラマ『元禄繚乱』の終わりの「元禄紀行」で、三平の墓が紹介されたことにより、多くのかたから墓の所在地についての問い合わせが、郷土資料館にありました。三平の墓は、箕面市立病院の北側で千里川沿いの、菅野5丁目の共同墓地のなかにあります。菅野三平（旧邸）記念館「涓泉亭」からも歩いて約5分ですので、あわせて見学されてはいかがでしょうか。

注①藤井光貞は、三平の母「小まん（もみじだより6月号の略称「参照」の弟「藤井家房」の子で、三平より8歳年上のいとこになり俳人「蘭風」の俳号をもっていました。

注②厚東休計は、三平の姉「おとら」が嫁いだ伊丹の「北河原好昌」の一族で、井原西鶴や上島鬼貫とも交流のあった著名な俳人でした。